

東鑑

世二

179  
74  
52

嘉禎四年正月  
至同十二月

新刊晋書卷第三十二

嘉祐四年

戊戌十一日

三日爲

仁元年

正月小

一

戊申 雨降今日烷飯

近作苗沙汰

御劍宮內少

輔泰氏

御調度

若狹守泰村

御行騰沓大和守祐時等

持樂之

一御馬

相摸式部大夫

本間式部參

二御馬

相摸六郎

櫛右馬允

三御馬

上總介太郎

同次郎

四御馬

本間次郎左衛門尉

同四郎

五御馬

越後太郎

吉良次郎

二日 巳酉 塚飯在京地御叙駿河前司義村  
御調度 玄番頭基經 御行騰 肥後守為佐

一御馬 北条左近大夫將監信濃三郎左衛門尉

二御馬 駿河五郎左衛門尉同八郎左衛門尉

三御馬 上野左衛門尉 同彌四郎

四御馬 近江四郎左衛門尉 佐久木六郎

五御馬 北条五郎 南條七郎左衛門尉

三日 庚戌 塚飯遠江守御劍右馬權頭政村

御調度 遠江式部大夫光時御行騰壹岐守光對

等持參之

一御馬 遠江三郎 小井豆左衛門尉

二御馬 陸興七郎 廣河五郎

三御馬 信濃三郎左衛門尉隱岐四郎左衛門尉

四御馬 小野寺次郎左衛門尉同四郎左衛門尉

五御馬 豊田太郎兵衛尉 同次郎兵衛尉

四日 辛亥 將軍家二所御精進始

九日 丙辰 二所御進設左京地供奉給御經供

養導師太納言律師降辨云

十日 丁巳 丑社三浦駿河前司玄番頭昌狹守  
家村等依失火災

十五日 壬戌零 午刻將軍家自二所還御

十八日 乙丑天晴 匠作在京地被候小侍所主  
計頭師貞毛利藏人大夫入道西阿玄番頭基經隱  
岐入道行西加賀前司康俊等依召參進將軍家御

上洛事有評議為康俊奉行御路次間余之事悉被召付奉行八等諸人不可彌供奉於信濃式部大夫入道行然者可俟御留主云亦為師貞奉行召陰陽師被問之來廿日御出門廿八日可有御進發而件日八龍也御出門之後者不可憚事歟但同擇宜日可有御進發之由有申行之人可為何樣哉可計者睛賢朝臣申云御出門之後強不及擇日次其故者暫有御坐于御出門之所者可准路次逗留之間也必以吉日御進發又可宜求來月二日三日可然日也此上猶可被問當道歟云早披露此趣重可被尋問當道之由左京地被仰之間基經參申御前不可有御延引之旨仰切訖云

十九日

丙寅

御所心經會也

廿日

丁卯

御弓始也今年依可為御物忌不可

有此儀之由窮冬雖被定故被遂之射手事取久俄於御前被仰合于如始義村爲催促被下日記於陣

與太郎云

射手

一番

小笠原六郎

二番

正横溝六郎

松里四郎

三番

四番 左邊左衛門四郎

本間次郎左衛門尉

四番

三浦又太郎左衛門尉 秋築小三郎

五番

下河邊右衛門尉

山田五郎

午刻將軍家依可有御上洛爲御出門入御于秋田城介義景甘繩家被召御輿御立烏帽子御直垂也供奉人行糸同奉摸其體云入夜在京地并室家御出門于駿河守有時弟

廿八日 乙亥天霽 聞軍家御上洛寅魁先賜賢參勤御身固今日八龍日也駢有其難歟之由雖有傾申之族御出門之上者不可及日次沙汰之旨被仰無御許容云已刻進發被用御輿護持僧岳崎法

印成源

栗真

御驛者公覺僧都隆辨律師賴曉律師

醫道施藥院使良基朝臣陰陽道前大藏權大輔泰貞敷位晴賢朝臣隨兵以下前後供奉人悉進談之零伍作未及御出門立刺有因碁會在京地頻被勸申之而被祇候入等之未被整簇具云乃京地被献野箭行騰等之後酉刻遼鞍給酉尉者御酒勾驛護持僧并醫陰兩道之輩宿被點御所近邊同雜事送夫等者為加賀前司奉行涉休給云廿九日辛今夕入御藍澤驛

二月大

一日 丁丑天晴 風烈半一點署御車返牧御所  
二日 戊寅天晴 大風舉塵蒲原御宿

三日

己卯天霽

手越御宿為左京地御沙汰被

儲御所又左京地室上洛給今日被立鎌倉

四日 庚辰天霽 峴田

五日

辛巳晴

懸河御宿爲匠作御沙汰仰遠江

國御家入等垂被造御所積地太郎兵衛尉長直為

奉行

云

六日

壬午霽

夕曉諸人乘替以下御出以前進

鼓搃玉霸之忠不及孤疑欲競渡天龍河之間浮橋

可破損雖加制敢不拘之由奉行人橫地太郎兵

衛尉長直等馳申仍左京地鷄鳴之程於懸河宿刻

于河邊著座敷皮雖不令發一言給諸人成禮猶豫

自然令靜謐訖將軍家御通之後乘馬供奉

云此河

水餓洛供奉人所從等者不能渡浮橋又無乘船沙

汰大半渡河水僅及馬下腹

云

酉刻入御池田宿

七日

癸未霽

著御橋本驛先之人々點定家

間陸奥太郎實時主宿于舞澤松原及成丸京地令

聞彼野宿事給被仰曰實時者小侍別當重職異他

尤可俟于御所邊之仁也而依無其所止宿驛上者

予暖座於里家之條有其恐

云

仍令到于陸奥太郎

野宿之間宮內少輔泰岱駿河前司義村以下人

多以辭申旅宿叢件松原還為諸人之煩早可令入

本所給之由各申之又遠山大和守辭旅店

御所招

請陸奥太郎之間京地憚人々礼令歸本宿給太郎

主施面目宿于和州本所

云

八日 甲申 寅尅以後小雨日出屬晴未刻又雨  
降著御豐河宿及深更風雨甚

九日 乙酉 霽 矢作宿八御于足利左馬頭亭依  
去夜風雨洲侯近兩河浮橋流損云

十日 丙戌 晴 豊津御宿亥尅將軍家俄御不例  
御神礮亂歟諸人驚騷醫師持長旆醫術之間小選令  
祿本御仍賜御劔京地令引御馬給云

十一日 丁亥 晴 今日御逗留于豊津宿依去夜  
御不例餘氣也其後修理兩河浮橋云

十二日 戊子 霽 小隈御宿

十三日 巳丑 天晴 垂井

十四日 庚寅 陰 小脇

十五日 辛卯 天晴 野路

十六日 壬辰 天霽 徒五位下行隱岐守藤原朝  
臣行村法師行名卒年八十四于時在伊勢國益田庄此  
間向彼所云今日將軍家御逗留野路驛明日御入

洛之間依被定隨兵已下行列也小侍所別當陸奥  
太郎實時注供奉人破持案之匠作京地於御前令  
定左右給之後被返奉行人云所被載將軍家御判  
於件散狀端也

十七日 癸巳 天頃快晴已竟御出野路宿先隨

兵以下供奉人自庭上至落次二行座列寄御興之  
後騎馬陞觀御以下於關寺邊見物云子刻御入洛  
署于六波羅御所毋間新造給

行列

先駿河前司隨兵

三番相並以家子三十人為隨兵

一番 大河戸民部大郎

大湊賀八郎

佐原太郎 兵衛尉

二番 筑井左衛門太郎

同次郎

皆尾太郎

三番 三浦久太郎 左衛門尉

同三郎

山田戩人

四番 武小次郎

同三郎

五番 秋葉小三郎

山田六郎

同五郎

同三郎

六番 多々良小次郎

同次郎 兵衛尉

青木兵衛尉

同三郎

七番 安西大夫

金摩利太郎

丸五郎

八番 丸六郎太郎

三浦佐野太郎

九番 石田三郎

三原太郎

十番 長尾平内左衛門尉

同三郎 兵衛尉

十一番 幢岐前司

駿河四郎左衛門尉

十二番 遠藤兵衛尉

同八郎武藏兵衛尉

十二番 駿河五郎左衛門尉 同八郎左衛門尉

三浦次郎

駿河前司

騎馬，  
人在前

御所隨兵百九十二騎

三騎  
一人

指各弓袋差  
步走三人  
在前

一番 小林小次郎

同小三郎

真下右衛門三郎

二番 猪俣左衛門尉

荏原七郎三郎

河勾野内

三番 二宮左衛門太郎

同三郎兵衛尉

同四郎兵衛尉

小串馬允

四番 他上藤兵衛尉

五番 大井三郎

品河小三郎

春日部三郎兵衛尉

六番 高山五郎四郎

江戸八郎太郎

同高澤弥四郎

七番 大胡左衛門次郎

母佐四郎畿人

大胡弥次郎

八番 都筑左衛門尉

同左近將監

遠藤左衛門尉

同左衛門太郎

九番 山内藤内

同左衛門太郎

十番 後藤弥四郎左衛門尉

佐渡五郎左衛門尉

十一番 伊勢藤内左衛門尉

門保田云瀬内根

十一番 小野寺小次郎左衛門尉 同四郎左衛門尉

菌田弥次郎左衛門尉

十二番 紀伊次郎兵衛尉 豊田太郎兵衛尉

同次郎兵衛尉

十三番

片穗六郎左衛門尉

和田左衛門尉

同四郎左衛門尉

十四番 殽父左衛門太郎

倉賀野兵衛尉

那珂左衛門尉

十五番

中澤小次郎兵衛尉

同十郎兵衛尉

河原右衛門尉

十六番

小河左衛門尉

河中八郎太郎

立河兵衛尉

十七番

阿佐美六郎兵衛尉

塩谷民部六郎

福原五郎太郎

十八番 下河邊左衛門尉

新開左衛門尉

大河戸太郎兵衛尉

十九番

中野左尉門尉

俣野弥太郎

海老名四郎

廿一番

柏間左近將監

多賀谷太郎兵衛尉

蛭河四郎左衛門尉

廿二番

本庄四郎左衛門尉

西条四郎兵衛尉

泉田兵衛尉

廿三番 中村五郎左衛門尉同三郎右衛尉

加治新左衛門尉

廿四番 阿保次郎左衛門尉加治丹内左衛門尉  
同次郎兵衛尉

廿五番 飯富源内

本庄新左衛門尉

那須左衛門太郎

廿六番 進三郎

多賀谷右衛門尉

江帶刀左衛門尉

廿七番 大本間次郎左衛門尉佐野三郎左衛門尉

高田武者太郎

廿八番 小河三郎右衛尉

平左衛門三郎

三村兵衛尉

廿九番 長掃部左衛門尉

長右衛門尉

長兵衛三郎

三十番 豊田弥四郎

秘元左衛門次郎

須賀左衛門太郎

卅一番 高山弥三郎

同弥四郎

矢口兵衛次郎

本村次郎

同小次郎

後藤三郎左衛門尉

同四郎左衛門尉

同兵衛太郎

伊連八郎太郎

伊連判官代

卅五番 佐竹八郎

結城五郎

佐竹六郎 次郎

卅六番 大曾祢太郎 兵衛尉 同次郎 兵衛尉

武藏左衛門尉

卅七番 長三郎 左衛門尉

長太右衛門尉

長内左衛門尉

卅八番 善右衛門 次郎

布施左衛門 太郎

卅九番 得江藏人

平賀三郎 兵衛尉

得江三郎

四十番 笠間左衛門尉

出羽四郎 左衛門尉

四十一番 信濃民部大夫

同三郎 左衛門

肥後四郎 左衛門尉

四十二番 壱岐小三郎

足立木工助

壹岐三郎 左衛門尉

四十三番 佐原太郎 左衛門尉 下總十郎

伊賀次郎 左衛門尉

四十四番 千葉八郎 相馬左衛門尉

大須賀左衛門 次郎

四十五番 内藤七郎 左衛門尉 押垂三郎 左衛門尉

春日部左衛門尉

四十六番 近江四郎 左衛門尉 豊前大炊助

加治八郎 左衛門尉

四十七番 武田五郎次郎 仁科次郎三郎

小野澤左近大夫

四十八番 宇都宮新左衛門尉 氏家太郎

筑後左衛門次郎

四十九番 和泉新左衛門尉 同五郎左衛門尉

和泉左衛門次郎

五十番 佐原新左衛門尉 同四郎左衛門尉

同六郎兵衛尉

五十一番 大井太郎

南部次郎

五十二番 宇佐美與一左衛門尉 弥次郎左衛門尉

關左衛門尉

五十三番 少輔左近大夫將監 同木工助

上總介太郎

五十四番 筑後圖書助

安積左衛門尉

伊藤三郎左衛門尉

五十五番 佐渡二郎左衛門尉 同三郎左衛門尉

同帶刀左衛門尉

五十六番 宇都宮四郎左衛門尉 同五郎左衛門尉

梶原右衛門尉

五十七番 加藤左衛門尉 河津八郎左衛門尉

河越錦部助

五十八番 小山五郎左衛門尉 宇都宮上条四郎

宮内左衛門尉

五十九番 伊豆守

武田四郎

小笠原六郎

六十番

藥師寺左衛門尉

淡路四郎左衛門尉

上野七郎左衛門尉

六十一番 陸奥五郎太郎

毛利藏人

那波次郎藏人

六十二番 若狭守

守都宮修理亮

秋田城介

六十三番 遠江式部采

越後太郎

六十四番 相模三郎

北條左近大夫將監

遠江三郎

六十五番 宮内少輔

次御曾持一人

次御甲著一人

次御曹持一人

次御小具足持一人

次御引馬一疋

次御乘替二人

童野  
童征  
箭候  
御輿  
右

次御輿布衣御力者三手

次着水干八升各野箭

一番 駿河守

備前守

右馬權頭

二番 長沼淡路前司 大河戸民部大夫 大和守

三番 天野和泉前司 玄蕃頭 佐原肥前七司

四番 肥後前司

江刺官

伊賀判官

五番 出羽判官 壱岐大夫判官 周幡大夫判官

六番

左京權大夫

隨兵三十人

着水干侍

不可勝計

後陣

修理權大夫

隨兵二十人其外十人着水干侍馬奇蘿鷺之等

廿二日戊戌天晴

將軍家始御出

御直衣

陰陽

頭維範朝臣候御身固先太相國御亭次御卷一条

殿今日不及前駁沙汰右馬權頭政村被候御車前

云

行列

先右馬權頭政村

次御車

八葉

宇田左衛門尉

四方田五郎左衛門尉資經

小宮五郎左衛門尉

本間次郎左衛門尉信忠

平左衛門三郎盛時

富所左衛門尉

若兒玉小次郎

小河三郎兵衛尉真行

參河三郎左衛門尉

飯富源内長能

次衛府八人

各布衣帶釵馬奇嚴次第

一番

内藤七郎左衛門尉盛經

二番

安積六郎左衛門尉祐長

三番

河津八郎左衛門尉尚景

四番

豐後四郎左衛門尉忠經

五番

上野七郎左衛門尉朝廣

六番

駿河四郎左衛門尉家村

七番

佐渡帶刀左衛門尉基政

近江四郎左衛門尉氏信

次虎從殿上人

左近中將親李朝臣

步三日 巴亥 雨降今月將軍家祭樂內自一祭

殿被差 驅前駕三人日中以後御出

行列

先駕駕

右馬權頭政村

治部權大輔兼牒

宮內少輔泰氏

左馬權頭盛良

備爾宇朝直

皇右宮權大夫茂能

次御車

八駕

小宮左衛門吹郎直家

平左衛門三郎

本間次郎左衛門尉信忠

若兒玉示次郎

四方田五郎左衛門尉資經

修理達三郎宗長

飯富源內

以上著直垂令帶劍御車左右

次衛府十人

各布衣帶劍

涼左衛門尉

和泉次郎左衛門尉景氏

宇都官四郎左衛門尉賴兼

河津八郎左衛門尉尚景

肥前太郎左衛門尉胤家

佐渡帶刀左衛門尉基政

藥師寺左衛門尉村

三浦又太郎左衛門尉氏村

信濃三郎左衛門尉行經

宇佐義藤内左衛門尉祐泰

次殿上人

左近中將親奉朝臣

入夜被行除日將軍家任權中納言今兼右衛門  
督給

廿六日 壬寅 將軍家令補檢非違使別當給  
廿八日 甲辰天寶 將軍家被奉御馬於公家

一御馬 大和前司祐持安積六郎左衛門尉祐長  
二御馬 大和守景朝 河津八郎左衛門尉尚景

以上四人引之各布衣帶鉢

今日中納言等御牒賀也爲御出立御覽以殿渡御  
大波羅殿於門外御下車是爲希代事則被差進前

駁五人云

先一員

番長安利

府生爲末

大志

少志家平

次前駁

右馬權頭盛長

宮內少輔泰氏

刑部少輔家盛

備前守朝直

治部權大輔兼康

右馬權頭政村

皇后宮權大夫茂能

駿河守有時

中務權少輔時長

越後守時盛

次御車

丹治部右衛門尉

小河兵衛尉

同左衛門次郎

本間次郎左衛門尉

平左衛門三郎

四方田五郎左衛門尉

立浪三郎兵衛尉基泰

富所左近將監

池上藤七康親

飯富源内

以上十人署直垂帶劔侍御車左右

先行

看督長四人

火長四人

雜色御後

次衛府二十人

下薦爲先

大見左衛門尉實景 宇佐美與一左衛門尉祐時  
宮内左衛門尉公景 宗宮内五郎左衛門尉

淡路四郎左方衛門尉時宗

伊藤三郎左衛門尉祐經 武藤左衛門尉景賴  
加藤左衛門尉行景 上野七郎左衛門朝廣

信濃三郎左衛門尉行經

近江四郎左衛門尉武信

出羽三郎左衛門尉光家

肥前四郎左衛門尉光連

壹岐三郎左衛門尉時清 關左衛門尉政泰

佐渡帶刀左衛門尉基政

小山五郎左衛門尉長村 大曾祢兵衛尉長泰

三浦遠江次郎左衛門尉光盛

三浦駿河四郎左衛門尉家村

次官人

主馬大夫判官家衡

次隨兵十人

三騎相並  
一騎

一番 北条左近大夫將監經時 相摸六郎時定

足利五郎長氏

二番

三浦若狭守泰村

宇都宮下野守泰經

秋田城介義景

三番

武田六郎信長

木曾原六郎時長

千葉八郎胤時

冢末

上野五郎重光

次扈徒公衆二人

宰相中將實雄

三位中將公經

次殿上人五人

左中將實光

二條少將孝定

權中將親季

近衛少將實藤

左少將為氏

以上乘車

廿九日 天乙巳天審 大理廳始也檢非違使廿六人皆參其中五位尉八人元大理出御各遂而拜云及晚將軍家御參內供奉人同去廿二日至曉更渡御于前右府并准左御亭云

冊目 丙午 夕一點將軍家還徳六波羅

八夜閏二月小

三日 己酉天霽 依御招請將軍家渡御大相國

禪閣御亭御儲被盡羨御贈物風流棚脚置各飭金銀

入夜還御六波羅

七日 壬丑天晴 戌刻佐安牛東洞院失火南北

二町餘災

十三日 巳未霄 午刻日有重暉陰陽頭維範朝臣帶繪圖家前馳桑六波羅殿殊申可有御慎之臣其後權天文博士李尚朝臣以下兩三人應召參上被下維範朝臣所進圖可勘申所存之旨彷彿之頃強亦重變去建保年中道昌朝臣申於水無瀨殿向虹貫日之由奏聞之時孝重朝臣申敗之變者今暉也云今夜維範朝臣奉仕天地災變御祭伊勢前司定貞奉行之云

十四日

庚申

雨下終日不休止雖有重變狀日

中降雨者可消歟之由奏貞朝臣兼申之云

十五日

辛酉大晴

戌刻維範朝臣又參六波羅

殿太白犯昴昴歲星犯坐星之中之仍爲將軍御祈被行屬星發在衝朝臣奉仕之戌四刻樋口町邊燒亡

十六日

壬戌

未过鞍馬寺燒亡失火云自小堂

火出來當寺者桓武天皇御宇延曆十五年丙子藤原伊勢人依貴布称明神之告草創以降星霜既三百八十餘年專為帝都擁護精舍云

三月六

七日 壬午天晴

將軍家令任權大納言給又去

皆別當給今日御不例御減之後御沐浴醫師時長  
朝臣視候

十八日癸巳 海老名左衛門大夫忠行被正位  
記宜為本官左衛門尉之旨 宣下是不蒙關東御  
免令直委 叙爵之間依有其沙汰也

十九日甲午 自去夜深更及辰魁雨降持軍家  
渡御北山別業亭主并一條殿前右府以下自去夜  
於此所被長待有御内遊半更還御六波羅

云

廿二日丁酉陰晚雨降今日於六波羅殿屈南

北二京碩學

波行仁王八講大殿准后為御聽聞入

御

云

廿三日戊戌

雨降未三點大風人屋皆破損庭

樹悉吹折申馳屬晴西風又烈御八講結願頗障  
也今日相摸國深澤里大佛堂事始也僧淨光令勸  
進尊卑繢素企此營作

云

十八日癸卯

今日春日行幸也

卅日乙巳

小山下野守從五位下藤原朝臣朝

政法師

法名卒年四

病患不經幾日數去比舍第

野入道日阿相共南都令登壇受戒

云

十一日四月小

天寒

丁未

三浦若狹守泰村二階堂出羽守行

義等被召加評定衆之由被仰下各領狀

云

六日辛亥天霽

將軍家 勅授事有

宣下

云

七日壬壬子晴陰

將軍家有大納言御拜賀之儀

扈從公邸殿上人連軒前駕以下同中納言御拜賀之時云辛安天喪

九日 甲寅天晴 今日天台座主

惠源僧正將軍御舍弟

拜堂

十日 乙卯天霽 一条殿御息若君

福王公將軍御舍弟

入

室于仁和寺御室給大殿御同車君達右府

良

幕

下寶將軍家御扈從後車雲客濟七焉件若君日

室來將軍家御猶子也忽被變其儀訖臣下御入室

乘代之例也及晚還御

晉

十一日 丙辰陰 及深更小雨降今日將軍家御

直衣始

奉慈園恭寧宮大殿堂事御舍弟

十六日 辛酉天霽

賀茂祭也將軍家御見物文

間無事花美超例年則御家人延尉能行家平基

政光重賴業等渡大路

十八日 癸亥天霽

將軍家令辭權大納言給

廿四日 己巳雨降

一条大殿兵仗御辭退被下

准三官宣旨

即又令辭之

廿五日 庚午雨降

今日一条殿於法性寺殿被

遂御素懷御戒師敍室前大僧正

良快九條唄師正殿御息

特法印成深御剃手法印印圓攝政殿以下濟六群

衆將軍家令參御

五月小

四日 戊寅晚陰

及晚自將軍家做調進昌蒲御

枕鑄金

并御扇等於公家云件御枕者爲六位定役

調進者也 而依破求御進物之次如此云

五日

巳卯

歲刻太白犯軒轅大星希代變異也

見于延喜天曆二代俱記云今日坊門大納言入道

殿可令謁申之由雖被示遣于左京兆稱風氣辭退

云是承久兵亂之時彼禪門罪科事左京兆殊依被

加潤色為故二品并右京兆等語計被宥之間為敷

其事今及此云

京地兼得其意不合向給云

十一日 乙酉 故左衛門尉坂上明定子息左兵

衛尉明胤領掌亡又遺跡事不可有相違之由含嚴

旨是石見國長田保幡磨國巨曾庄地頓職河內國

監細作手奉行近江國天福寺地頭等事云去年十

月四日父讓之死去明定依為若人左京兆頻憐愍

遺孤給云

十六日

庚寅

今日將軍家渡御右府御亭御史

遁中若君

王所劍給之卜鳥飛去自籠內在庭

前掘之稍若若周章給之間諸大夫侍等雖馳走無

所于欲取或雲客申云將軍家御共大略勇士也召

其弓上手可令射取之給云

仍若宮參御前申此

由給此事將軍家殊有御思慮撰小冠召上之上

十郎朝村此鳥不死之樣可射取之由被仰含朝村

未能辭申取弓與引目進寄于樹下彼木枝葉尤茂

小鳥之姿煙雖足于葉之際枝差違弓非養由者輒

難獲之歛朝村蹲踞庭上取小刀削丸引目矢柱二

之後狹之數丈幾廻樹下諸人見其氣色敢不瞬遂

發箭無止聲箭落庭上朝村即持幾件箭鳥所入于引目內也削捨目柱事此用意也被入籠中之處動

尾羽囀鳴堂上堂下應嘆之聲滿耳將軍家令解御

衣給亭生被各出御劍各爲朝村經頭云

十八日壬辰不相摸國深澤里大佛御頭奉舉之

周八丈也

御車乘

御車乘

御車乘

御車乘

御車乘

廿日己甲午陰晴候今日以將軍御家人左衛門少

尉藤原時朝

予蓋

藤原朝村

号上野

等被加前右六

臣象

普光

御簡衆於朝村者依感射藝給父御所望

云

十六日大

今日

御車乘

御車乘

御車乘

五月戊申天霽

將軍家御衆春日社申尅雨降

及深史雷鳴降雹

御出行列

大行太師之義

先駿河前司隨兵六騎

一番

長尾平内左衛門尉景茂

同三郎兵衛尉光景

二番 駿河五郎左衛門尉資村

同八郎左衛門尉胤村

三番

駿河五郎左衛門尉資村

同八郎左衛門尉胤村

先陣駿河前司義村

次御所隨兵三十騎

一番 河内守光村

千葉八郎胤時

二番 駿河右衛門尉景俊

二番 下河邊右衛門尉行光 關左衛門尉政泰

三浦又太郎左衛門尉氏村

三番 佐波次郎左衛門尉基親 佐竹八郎助義

相馬次郎左衛門尉胤經

四番 氏家太郎公信

大曾祢兵衛尉長泰

壹岐三郎左衛門尉時清

五番 筑後國書助持家伊東三郎左衛門尉祐經

守佐美與一左衛門尉祐時

六番 遠江次郎左衛門尉光盛

和泉次郎左衛門尉景氏

加藤左衛門尉村景

七番 武田六郎信長

大井太郎光長

近江四郎左衛門尉兵信

八番 若狭守泰村

秋田城介景

佐原肥前之司家連

九番 相模六郎時定

足利五郎長氏

河越掃部助泰重

十番 北条左近大夫將監經時

遠江式部大夫光時 陸奥掃部助實時

次御輿以下如御入洛時

江戸八郎太郎景益 山内藤内通景

品河小三郎實貞相替

池上藤兵衛尉康光

山中澤十郎兵衛尉成經本間次郎左衛門尉信忠

小河三郎兵衛尉直行阿保次郎左衛門尉泰實

猪俣左衛門尉範政 四方田五郎左衛尉資經

本庄新左衛門尉朝次 修理達三郎宗長

平左衛門三郎盛時 立河三郎安衛尉基泰

莊原三郎貞政

以上下五人直垂帶敘列步御輿左右但各五人  
令結番毎經行程二里互休息

次署水干人

一番 相摸守重時

武藏守朝直

右馬權頭政村

宮内少輔泰氏

二番

越後守時盛

甲斐守泰秀

下野守泰經

三番

玄番頭基經

壹岐大夫判官泰經

四番

肥後守前司爲佐

江大夫判官祐行

出羽判官家平

五番

大藏少輔景朝

伊賀左衛門大夫光重

後藤佐渡判官基政

六番

紀泉前司政景 大和前司祐時

信濃民部大夫行泰

後陣

左京權大夫

修理權大夫

已上兩所後騎數百人相列如雲霞此外人从  
類或擣前路或追成群

六日

己酉天霽

日中雷雨今日將軍自春日社

還御

七日

庚戌天霽

遠江三郎時長主補藏人參內

之間布衣侍五人雜色一人如不童一人相具之今

日即任右衛門權少尉云

云

九日 壬子 紀伊國日前官營作事付成功而可造畢之旨依被宣下將軍家所令舉申給之任人等于今不進其功之間有社司之訴仍無未濟可致涉汰之由被仰下云

十日 癸丑 加賀前司康俊依所勞麤怠辭申問注所執事之間以于息民部大夫康持可為其替之旨被仰下云

十四日 丁巳 前加賀守從五位上三善朝臣康俊卒年七十二

十六日 壬戌 為洛中警衛亡辻々可懸籌之由

被定仍被充催役出御寮人等云

廿二日 丙寅 諱定厥下若君福王於仁和希有

禪剃髮之儀云成寔北邊焼亡

廿四日 丁卯 終夜雨降今日土御門大納言通方薨年左京兆令訪之給

廿五日 戊辰 雨降終日不休壬魁大風霹靂洪

水人墜多破損梅尾清瀧河邊地出云

廿六日 己巳 天晴 今日攝政殿宇治入延引依去夜雨洪水之故也

廿八日 辛未 晴 脫頭雷雨今日任大臣召仰延

引來月可破行之云

七月小

二日 乙亥天晴 午尅以後降雨今日任大臣召

仰之

九日 壬午晴 今日攝政殿宇治入也扈從殿上

數十人公孤一人御弟大納言

十日 癸未天霽 寅尅熒惑與鎮星同變之由司

天之峯舉勸文

十一日 甲申 左京兆密參國城寺給是去年當于禪定二位每一十三年御忌景爲奉報波恩德於鑑倉所破終書功之一切經五千餘卷今日又迎伴御忌不被奉納于康院靈場也當寺皆聖靈之御歸依施主御渴御異他所每經卷之與令加左京兆署判給

十六日

己丑天晴 將軍察令蒙本座 宣旨給

云

十七日 庚寅小雨降

准后

禪定殿下

於法性寺

殿令落飭給御戒師飯室僧正良快

云

十八日 癸巳霽 今日任大臣節會左大臣

實右大臣

臣親內大臣

副家云

廿三日 丙申晴陰 成尅小雨降今日卯一刻將

軍家御參石清水八幡宮午尅還御

廿五日 戊戌晴 法性寺禪定殿下御出家後始

御參內前駕四人坊官四人繩索後車各一所

廿七日 庚子 六波羅御造營所役事無沙汰之

國々相交之而有其沙汰早可令辨償之由今日彼

仰下云

八月大七

二日 甲辰 將軍家爲令果年來御願給於春日  
社壇被供養一切經道師東北院僧正圓玄題名僧  
百口云

十八日 庚寅 終日雨降八所御靈祭延引云  
十九日 辛酉 雨休止然而時々又時雨澑山坡  
國惡黨新平太召禁之處逐電訖仍付在所可生膚  
之由被相觸山城等主人又可止雙六之由被仰  
下云今日御靈祭也將軍家於令出河殿御見物問  
渡物風流緝舊異例云

廿五日 丁卯 將軍家令參賀茂祇園北野吉田  
等社給云

九月小

一日 癸酉雨 出左京兆御亭被始行七箇夜大  
土公祭今夜恭貞朝臣奉仕之清基家氏晴茂國繼  
親穢等朝臣被結番之云

九日 辛巳 寅刻太白犯大微右執法星月時熒  
惑犯軒轅歲刻月犯歲星指去一尺所又自亥刻迄丑時  
流星或七八尺或三四尺不知其真色白赤今日為  
齊藤兵衛入道淨圓奉行地頭間事有被經沙汰之  
余々所謂云本公司跡云新補率法不可混亂兩樣之  
由下知之處不敘用出違犯者改易其所可被充行  
勲功未給之輩次令補地頭之輩或肖先例或違父

祖例之由訴訟之端不從御下者召其所可充行  
宮仕忠勞之輩并所知督次御祈勤仕人入跡事有  
如先條之子細者其所可充給他入云

十一日 壬未 山城國中庄園卿保惡黨等事殊  
可禁過由有沙汰云

十三日 乙酉 今夜明日得霽左京兆先年仰在在  
京有令對面給之人御懇志于今不等閑以月真為  
嫌被遣一有御歌

三ヤコニテ一モカハラヌ月影ニ昔ノ秋ヲウツシテソミル  
十八日 庚寅晴 于魁殿下北政所御流產君七  
箇月云

十九日 辛卯晴 右馬權頭政附為將軍家御使

被參殿下依令訪申去夜御事絲也

廿日 壬辰 賀茂別當社領近江國安曇河御屬  
内藤江村事可止使入都之由被仰守護人近江入  
道虛假是依教神之異他也

廿二日 甲午宵 初齊宮令入野宮御云

廿四日 丙申晴 辨僧正定豪入滅去年補東寺  
長者不經樂旬月云是民部少輔源延俊男兼豪法  
印入室灌頂第子也

廿七日 己亥霄 御家人任官事所望之輩可令

減納成功之由相議之旨既有其聞今日被經沙汰  
可停止云凡成功之官職之外不可有御舉之趣被  
定云御在洛之次望申官位候多之又有御吹舉仍

爲固向後之法及此評定詮勾甚者相摸三郎入道  
真昭也

十月大

三日 甲辰 陰晴 入夜甚雨今日鞍馬寺上棟將軍家有御奉加馬三疋御劔砂金等也河越掃部助爲御使云

四日 乙巳 雨下 松殿禪定殿

師家於天王寺

薨云今日南都往侶武藏得業墜圓補東大寺別當軛是去々年南京衆徒蜂起騷動時竭忠筭於關東之閭可被行勸賞之旨依有兼日約諾也當寺前別當賴曉得業者隱置承父兵亂張本秀康子息刺掠頤山邊庄其過已重疊可被改易之由被觸仰東大

寺別當僧正坊之處件寺者爲賴曉別相傳非本所成敗休其事之咎於沒杖者直可有御沙汰之旨就被報申及此御計

七日 戊申 松殿薨給事前武州訪令申還跡給

松殿薨給事前武州訪令申還跡給

小野澤左近大夫仲實爲御使云

十一日 壬子 丹後國曾我部庄者依為後白河

院法華堂領不被補地頭仍可停止守護使入部夜

討以下事出來之時者庄家糺明犯否可召渡其身之由今日被施杖前武藏守故右幕下御遺命殊被

重彼法華堂事之間令申行給之云

十二日 癸丑 將軍家御參內御直衣右馬樞頭

盛長刑部少輔家盛等供奉後車親李朝臣也其後

凌御一条今出河兩御亭明日可有御下向關東之  
故也於一條殿御贈物繁多也拾遺納言行成  
古今和歌集雅忠朝臣相傳醫書等在其內云今日  
畿內西國中庄園邸保住人好以強竊博奕及傷殺  
害為業董事不嫌禪社佛寺權門勢家領不相觸召  
取其身且可注進在所之中彼仰含守護人等云

十三日

甲寅天霽

寅一點將軍家關東御下向

御進發也御持僧亞崎僧正成源醫師良基時長等  
朝臣也陰陽師泰貞時賢等朝臣又陰陽頭維範朝  
臣被召具之忠尚李尚在直等朝臣候御身固前後  
陣供奉入隨兵等同鄉八之時但各行粧花義軼前  
儀矢相國禪閣於四宮河原偶見物搔河大納言寶具

那於大津浦破立車基外跡相雲客車不可勝計凡  
見物縮素以面為面蜀南冠着紳小賄驛江入道虛  
假立御所奉入御儲結撫無比類云

十四日 乙卯晴

近作前武州令參旅御所給可

然宿老多以著座小侍及杯酌數缺佐野木工助俊  
藏等候陪膳虛假獻御引出物云已剋止御未以後  
雨降日斜箕浦御宿

十五日 丙辰

未魁垂井御宿

十六日 丁巳

申魁 小隈御宿

十七日 戊午霽

覺津

十八日 己未霽

有熱田社御奉幣酉一點入御

矢作宿邊左馬頭美氏朝臣亭

十九日

庚申

入夜雨下戊一魁書御豐河驛

廿日辛酉風雨

辰魁出於本野原甚雨暴風

然而御輿崩後入者不及擁笠皆以毬鼻午刻以後

屬晴酉刻擣本御宿

廿一日壬戌霄

池田

廿二日癸亥晴

懸河

廿三日甲子晴

鳴田

廿四日癸乙丑晴

蒲原

手越

廿五日丙寅霽

御逗留蒲原宿駅依御不例也

廿六日丁卯晴

未刻車返御宿

廿七日戊辰霽

躬澤竹下御宿

廿八日己巳晴

酒勺驛濱部御所

慰著御籙倉廩所

十一月大

十七日戊子入夜雪降於御所有和歌鄉會前

武州被參真昭基經基政親行等爲其衆甲斐守參

秀經營有盃酒置物等

云

廿八日己亥去十六日除目聞書到來將軍家

有御覽右大將

義平公即所被遣御賀札也

廿九日庚子天霽

今晚太白星祭以下被行御

祈等今日將軍家御參鶴里八幡宮未克御出

御東帝御

維範朝臣候頭閑周防守光時役御劍今夕地震

十二月大

二日

癸卯

雪降

三日 甲辰 夜半以後雪下及午刻天晴今晚北條左親衛爲見鳥立被行向大庭野三浦若狹守同駿河四郎左衛門尉同五郎左衛門尉下河邊左衛門尉遠江三郎左衛門尉武田六郎小笠原六郎以下射手等多以被相伴云

七日 戊申晴 今日評議之次就諸堂供僧等事有被定之旨是臨病患附屬非器弟子又立名代之後落墮世間猶貪其利潤事向後可停止云之由云九日 庚戌天霽 午刻地震今日京都使者叢著去月廿三日改元改嘉禎四年為曆仁元年維範朝臣撰進之依榮惑變及此儀云

十三日 癸丑 大雪降曝之後北條左親衛相具若狹守以下八人逍遙山內邊雉兔多獲之十四日 丁巳 終日雨降今日評定御家人等不臨重病危急之期者不可讓所帶於妻妾之由被定云其後近作前武州被參御所有恩澤沙汰基經奉行之

十八日 己未 每月六齋殺生禁斷事被仰下但河海漁人為渡世計者詐制止之由云

十九日 庚申 於御所節分御方違事有其渺汰可被用遠江守名越宿所之由前武乃令申給之處云清右衛門大夫季氏申云彼所天一遊行方也可有憚云被問陰陽頭雜範朝臣公家之外不可有其憚

之由之仍始定名亭遠云

云

廿三日 甲子霄 戊尅將軍家爲御方遼入御遠

江守朝時名越亭是日來御本所也今匠作注家

領廳貟數配分給于子息等之大體內之綏申合前

武効少々有用捨事

云

廿四日 乙丑晴憚御退留遠州亭今日依爲歸已  
日也是無甚之由陰陽道雖勘申之法性寺殿令  
忌御間被追御佳例

云

廿五日丙寅自名越還御遠州被進御引出物御叙  
式部叅時章御馬遠江修理亮時辛同五郎時盡等

引之

廿八日 巳巳 近作前武効遠江守右焉權頭駿

河守宮內少輔等被參右大將家二位家前右京兆  
等法華堂爲戊不之故駿駿河崩司毛利藏人大夫  
入道甲斐守秋田城介參會

云

廿九日 庚午天霄 戊尅周防前司親實家燒亡  
失火

云

卷之三

醫學

三

大丸

小丸

散故

